

「ええ！？ 僕が行くんですか？」

「そうだよ、わしはこっちで手が離せないからな、少し心配だから急いで行ってこい！」

婦警の早乙女の姿が見えないと、そして押収されていた暴走族が乗ってでもいたような改造車を見て不審に思った両津は、彼女らの居場所を突き止めるも、用があるということで中川に出向くように指示を出した。

自分がいかなくとも大丈夫だろうと判断し、中川も婦警がもしかしたら危険な目に遭っているかもしれないと言われたら断ることも出来ない。

慌てて両津に言われた場所に乗り込んだ、そこまでは良かったのだが——。

「ふー、ポリ公の応援が来たというから驚いたが、たった一人でラッキーだったぜ……」

——予想を遙かに超える40人はいる暴走族たちに逆に捕まってしまっていた。

そして、暴走族たちの輪の中心に連れていかれるとそこには——。

「な、中川さん！？」

「早乙女さん、すみません……助けに来たつもり逆につかまってしまいました……」

——下着姿にされた早乙女ともう一人の婦警がいた。

気の強い彼女も流石にこの大人数相手にはどうすることも出来ないでいて助けを待っていたのだが、中川も捕まってしまっている。

不良に突き飛ばされて、早乙女と同じくコンクリートの地面に転がされた中川は、彼女に「僕が戻らなければ先輩が助けに来てくれるはず」と安心させるように囁いていた。

その囁きに彼女たちは小さな希望を持っていたのだが——。

「しかしなあ、ただ捕まえて裸に剥いてても面白くはねえよな？」

——などというリーダー格の男の言葉を受けて、不良たちはニヤニヤと笑い賛同していく。

普段自分たちを目の敵にしている警察を前にして、舌なめずりをした彼らは——。

「そうだ、せっかく男も来たんだしよ、こいつらヤらせっか？」

——そう告げた。

中川と早乙女がその言葉の意味に気が付き、必死に抵抗を始めれば始めるほど男たちは楽しそうに笑っていく。

「やめなさい！ ふざけないで！ このっ、クズっ！ やめ、やめなさい！」

早乙女は大きく声をあげて手足を暴れさせようとするが女の力で複数の男の腕力に逆らえるはずもない。

そして中川もまた多数の男たちに抑え込まれて、服を全て剥ぎ取られると全裸で大の字で固定されることとなった。

「ヤラせる」とは言ったものの、この状況で中川は勃起しているはずもなく、このままではセックスには臨めないのは明らかだった。

しかし——。

「おい、お前見てるだけじゃつまんねえだろ？ こいつのチンポしゃぶって勃たせろ」

「え……そ、そんな……」

——それすらも余興にするつもりのようだった。

もう一人の婦警に命令して中川のチンポをしゃぶらせようとしていた。

もちろん彼女も拒否し、抵抗をしようとするけれど、それで許される訳もなくナイフを突きつけられると、泣きながら中川のものをしゃぶりっていく。

「ごめんなさ、い……れろ……れろ……ちゅ……れろお……」

「うつ……あ……！」

衆人環視の中でのフェラチオに涙を流すも、「舐め方が生ぬるい」と怒鳴りつけられて婦警は必死に「じゅぱじゅぱ」と音をさせてしゃぶり、周りから「彼氏にもそうやってんのか？」などと野次られていく。

そして、しばらく舐められれば、中川のチンポも勃起してしまう。

本人の意思とは無関係に勃起させられれば、本番が改めて開始となり、フェラをしていた婦警は引き離される。

まるで小さな子にオシッコでもさせるように足を広げて抱えられた早乙女の下着が剥ぎ取られ——。

「いやっ！ いやあああ！ やめなさ、やめて！ ふざけないで！ いやあああ！」

——必死に抵抗する彼女がゆっくりと中川のチンポめがけて下ろされていく。

中川もどうにか抵抗をしようと手足に力を込めるが複数の男たちに抑えられている状況では無駄な抵抗でしかない。

そして——。

“ぬちゅっ”

——二人ものモノが触れ合い、そのままゆっくりと、いや、面白がった不良たちが一気に早乙女の身体をそこへと下ろしていく。

“ずぶうつづ”

「うっ……！」

「ひいいっ…………っ！」

挿入される中川のチンポが早乙女のまんこを貫いていく。

手を後ろで縛られたまま騎乗位で挿入したような姿勢となり、早乙女は急な挿入に違和感と、そして快感に腰をくねらせてしまう。

その動きは不良たちの興味をそそっていくことになる。

「へへへ、婦警のくせに腰使ってやがる！」

「普段から相当激しいセックスしてんな、ありや」

自分たちを取り締まる警察官を見世物にする楽しさに不良たちはどんどん盛り上がりしていく。

中川はどうにかしようにもどうにも出来ずに、ただただ早乙女のまんこの中にチンポを震わせるしか出来ない。

その微妙な動き、刺激に早乙女は腰がまた動きそうになるけれど、笑われるのを嫌って耐えていく。

耐えていくのだが、ただ挿入しているだけじゃ不良たちの見世物として納得はされない。

「おい、腰振んなきゃつまんねえだろ！ さっさとケツ振れ！」

「ちゃんとやんねえと、こっちのポリ公めちゃくちゃにしちまうぞ？」

「っ……！！ この、クズ……！」

ただ挿入で終わらせずに腰を振れと命令して、更に中川にフェラをした婦警を人質の様にナイフを突きつけている。

その卑怯な行いに早乙女は顔を真っ赤にするほど怒りながらも、下手に逆らって同僚に傷でも負わせたらと思うと、中川に小さく「ごめんなさい」と呟いて——。

「ふっう……！ んんんっ……！」

——震える足で、手を拘束されたまま、がに股で腰を振っていく。

いくらこんな無理矢理やらされている行為であっても、粘膜同士の接触、快感は当然ある。

必死に早乙女は声を我慢する、感じた声を出して不良を楽しませたりなんかしないと誓っていた。

だけど、腰を振ればふるほど敏感さは高まっていく。

「んっ……！　んんっ……んうっ！　っ！」

歯を食いしばって腰を振る姿はエロく淫らしい。

不良たちが「もっと腰振れ！」「声出せ！」と囁き立てる中で、早乙女は形の良いお尻を上下させて腰を振っていった。

だけど、なかなか声をあげないことに業を煮やした不良たちは改めて早乙女の身体に手を伸ばした。

「なっ！？　やめなさい！　なにす、やめろ！」

「手伝ってやるだけだってえ❤　なあ？」

「そうそ、お巡りさんがノロノロしてっから、よ！」

早乙女の身体を掴んだ不良たちは、彼女の身体を雑に上下に動かし始めた。

まるでオナホ扱い、無理矢理に敏感なまんこを擦られる快感。

さっきまで必死に我慢していたこともあって、ついには——。

「いいいっ❤　ひいいいいいっ❤」

——早乙女も限界を迎えて陥落。

大きな快感の声を漏らしていくことになった。

「や、やめなさ、いいいっ❤」

まるでオナホ扱いの早乙女。

中川のチンポを扱くだけの道具にされて、普段は取り締まる不良たちの見世物として笑われていく。

声も、必死な顔も、垂れるマン汁までもが都合良いネタとして笑われていく。

「ひいい❤　いい❤　やめってっ❤　やめ、ああああ❤」

良い声をあげればあげるほど不良たちはテンションをあげていき、早乙女の身体を上下に揺らさせていく。

その後、二人は不良達が飽きるまで色々な体位でのセックスを強要されることとなっていくのだった。